

中国新聞掲載「備後史のスズメ」

福山城物語



園尾裕

中国新聞掲載「備後史のススメ」

福山城物語

はじめに

今の福山市がどのようにして出来てきたのかを知ることが、歴史を振り返ることが欠かせないと思います。

このたび、懇意にしている方からのご案内により、十五年以上前に、元福山市学芸員（当時福山城博物館学芸員・園尾裕氏）が執筆された中国新聞掲載の「備後史のススメ」シリーズの記事と、それを纏めた冊子を拝見する機会があり、「福山城物語」は、どなたでも分かりやすく読むことが出来て、福山市の歴史の一端を知る上でとても良いと感じました。

二〇二二（令和四）年は、福山城築城四〇〇年の記念の年でもあります。

福山市においてもさまざまな記念行事が行われています。

これを契機として、先人の歩みや大切にしてきた思いを、あらためて振り返り、福山城をはじめ、市全体の歴史・文化資源などの価値を再認識し、磨き上げ、その魅力を市内外に発信することで、「城があるまち福山」を市民全体の誇りとしていきたいと思えます。

このたびインターネット上へ「福山城物語」を公開する事に、快くご承諾とご提供くださいました園尾 裕氏には、心より感謝申し上げます。

二〇二〇（令和二年）六月

岡崎 正 淳



第1回 福島正則の治世

天下分け目の戦いとして知られる「関が原合戦」により毛利輝元は、九力国にまたがる領国の内七力国を没収され、防・長二国三十六万石の大名として広島城を退去する。輝元に替わって、芸備二国を領したのが福島正則である。

正則は、豊臣秀吉子飼いの武将として知られ、天正十一(一五八三年)の「賤が嶽の戦い」では、「七本槍」の一番駆けを果した勇将である。秀吉恩顧の武将のなか

では、加藤清正らと並んでもっとも剛勇を馳せたのである。

福島正則が芸備二国の大名に封ぜられたのは、関が原合戦の恩賞であり、慶長六(一六〇一年)三月に広島城へ入ったと伝えられる。領国経営にあたっては一円にわたる検地の実施、税制の確立など近世的諸制度の整備・確立を進めていく。名実ともに徳川政権下の一大名として、近世的秩序を打ち立てようとする。尾張清洲で十萬石の大名であったのが、四十九萬八千石の大名となったのであるから、

その率いる家臣団は、清洲から引連れた士卒以外にも、新規召抱えなどによって、膨張したことだろう。福島氏の家臣団は、ほとんど在地との因縁をもたない者たちによって構成されていたことに特徴がある。

さて、彼は芸備二国の領国支配のため六カ所に出城を築き、それぞれ有力家臣を配した。尾関石見は三次城、福島丹波は神辺城、長尾隼人が東城城、三原城には嗣子の福島正之などである。また、『福島太夫殿御事』によると、『太夫殿(正則)』

中略備中国境神辺と申所古城を取立福島丹波入れおかれ、備後の軻という所新城取立大崎玄蕃置かれ候(下略)とあって、軻にも新しく築城したことを伝えている。

ところで、福山を中心とした備南の守りは軻と神辺であった。軻城は、以前からあった中世の大可島城とは別に、新たに「地をならし石を畳み」、三重の天守閣をはじめ、大手門・櫓なども備わったと伝えられているが、詳細は不明である。

神辺城は、中世以来備後守護山名氏等の要害であり、正則は筆頭家老の福島丹波守正澄をここに配し、弟の玄蕃は、神辺城番であった。

ところで芸備二国の領主として福島正則が治世したのは僅かに十八年である。元和三(一六二七年)春、長雨で太田川が洪

水となり、城下は多大の災害に見舞われた。正則は城郭損壊の修復許可を得るため、再三にわたって幕府へ申請する。しかし許可がなかなかおりないため、結局將軍の許可を得ないまま修築を進めたのである。

これが幕府に罪を問われることとなった。正則は、修理箇所を破壊して謹慎の態度を示し、一時はことなく落着するかに思われた。しかし、六月になって福島氏改易が決定したのである。

正則は江戸の藩邸でこの命を受け、奥州津軽四万五千石の地に移されることがなった。その後、幕府は津軽の地を信州川中島に改めたので、正則はこの地高井野村に蟄居し、寛永元(一六二四年)七月、六十四歳で逝去した。



神辺旭高等学校から黄葉山を望む。この山の上にかつての神辺城が築城されていた。



高屋川右岸から見た黄葉山

中国新聞 2004(平成16)年6月13日(日)掲載原稿

備後史

第13部 福山城物語

② ススメ

福島正則の改易に成功し、占領地の城郭破壊、した幕府は、一六一九(元禄)年七月二十二日、福島藩に和令を出し、藩政を徳川幕府に引き継がせ、藩政を海路、このように背景を考えた。勝成は、海路、西下し八月四日、鞆津に上陸した。ここで幕府派、遺の上使五味金右衛門・伊丹喜之助・松平右衛門などから、御前帳本高十萬十二石六斗七升一合の領引を受け、この領引を渡した。その後、勝成はひとまず神辺城に入った。すべき天守閣のそばに立つに幕府は「一國一城令」の破却候様に被仰出候。第一歩として着手されることになったのである。

この法令のねらいは、西日本、本州の外様大名の制圧にある。

勝成は入国早々領内を巡視し、新領の府も難色を示した。このように考え、候補地を探したのである。当時の、年貢米を大坂へ回送するうえで、瀬戸の福山市新市町・沼内海航路は決定的な重要所であった。福山城の備後、深津郡野上村常興寺山、現在の丸之内の三カ所がまず選出された。そして、野上村常興寺山、福山城の備後、深津郡野上村常興寺山、現在の丸之内の三カ所がまず選出された。そして、野上村常興寺山、福山城の備後、深津郡野上村常興寺山、現在の丸之内の三カ所がまず選出された。

江戸期の鞆の町を描いた絵図。水野勝成はここに上陸し、神辺城に入った。

一國一城令 要衝常興寺山に白羽

御前帳本高十萬十二石六斗七升一合の領引渡しを受けた。

その後、勝成はひとまず神辺城に入った。すでに幕府は「一國一城令」と被仰出候。この法令のねらいは、西日本の外様大名の制圧にある。占領地の城郭破壊、城割政策が徳川幕府によって

勝成は入国早々領内を巡視し、新領の府も難色を示した。このように考え、候補地を探したのである。当時の、年貢米を大坂へ回送するうえで、瀬戸の福山市新市町・沼内海航路は決定的な重要所であった。福山城の備後、深津郡野上村常興寺山、現在の丸之内の三カ所がまず選出された。そして、野上村常興寺山、福山城の備後、深津郡野上村常興寺山、現在の丸之内の三カ所がまず選出された。

徹底されたものといえる。

このような背景を考えれば、神辺城の主だった建物はすでに取壊されていたであろうが、要害の山城に変わりはなく、福島丹波の屋敷跡や、侍屋敷も備わっていた。家中の侍たちはとりあえずここに居を定め、近世大名の権威の表象ともいうべき天守閣の聳えたつ城郭作りが、領国経営の第一歩としてまず着手されることになった。

勝成は入国早々領内をくまなく巡視し、新城の候補地を探すのである。その結果、品治郡桜山現在の新市町・沼隈郡蓑島現在の箕島町・深津郡野上村常興寺山(現在の丸之内)の三か所がまず選び出された。そしていろいろ検討の末、桜山は海陸の交通路から離れており至極不便であったためこれを除外した。蓑島は、当時孤島であり西国監視の立場から甚だ不都合であり幕府も難色を示した。

当時は、年貢米を大坂へ回送するうえで、瀬戸内海航路は決定的な重要性をもっており、また、海陸ともに交通の要衝であることが求められたのである。野上村常興寺山は、山陽道に近く、しかも街道筋からはずれており、芦田川の川口を押さえた要害の地で、北は丘陵を背にしてほど近くに平野が控えており、南は近く内

海に臨む湿地であった。このような考えから結局常興寺山に決定した。

福山城郭の縄張りは、搦手を自然の城堀とするとともに、のちに城下町を建設した常興寺山南面を芦田川の氾濫から守るため、芦田川の水を城背の蓮池にため、この池の水を吉津川として海に流すことから始まった。

城郭は南面しており、東・南・西側に二重の堀をめぐらし、搦手は常興寺山の後方に位置する小丸山および松山を天然の防塁とし、吉津川に臨み、川を隔てた永徳寺山を北方の固めとした。常興寺山の最上段を本丸、北隅には五層六階の天守閣を、南側平坦地に城主の居館である伏見御殿を、西南隅には伏見櫓を配した。本丸は四周に帯曲輪を配し、二重の石垣によって囲まれており、所要所要所には二・三層の櫓が数多く設けられ、これらは渡櫓や練堀によって結んだ。

ついで常興寺山麓の東・南・西側に外堀と内堀を二重に掘り、本丸・二之丸・三之丸の縄張りが進められたようである。東南部には、外堀から海に通じる入川を浚渫し、ここには、藩府の御舟入が設けられており、藩船を繋船すると共に、その周囲は船奉行をはじめ、船頭・水主の屋敷に当てられていた。



鞆町絵図

福山城完成までは神辺城と並んで鞆城は重要な拠点であった。鞆町東西三町余と南北七町余の町域を神社と寺と町方に色分けした彩色の絵図で、屋舗と在番屋舗の西側に神社と寺院が軒を並べ、小高い屋舗を取り巻くように町人町が配置されている様子がうかがえる。

備後ゆ ススメ ③

第13部 福山城物語

備武は、鎧・青をきき、めく意味で、戦乱が終り、天下が太平になることをいう。一六五(元)は、大坂夏の陣の戦い。一六五(元)は、大坂夏の陣の戦い。一六五(元)は、大坂夏の陣の戦い。

家老中山将監重盛を惣奉行に、重臣小場兵左衛門利之らを土工奉行に任じ、勝成自らも常興寺山を招き、鍛冶・金具師・石工・木挽等の職人を領内の各地から集めたといわれている。

「西国の鎮衛」築城を指揮

水野藩時代の福山城古絵図。当時の家老が作製した

この明王院が草戸にある古刹常福寺と合併し、現在の明王院となったのである。細張りがほぼ定まると、城郭の普請が急がれた。石材は、近辺の古城に残る石垣を取り崩す一方、新に切場から調達した。福山湾沖の笠岡に浮ぶ北木島などから、海路舟で運び、吉津川を遡り龍興寺の下で積み降ろした。ここから城山まで運んだ。城地は東・南・西の三方削り、山頂を削平し、石垣を積み、内外二重の堀を掘り込み、これらの土砂は城下町の埋立てに使われた。

築城にあたっては領内の村々から多くの人が駆り出されたこと、八月十五日、勝成は正式に入城し城号を「鉄覆山朱雀院久松城」と命名している。そして、八月二十八日勝成自身出府して、将軍に最後の完成報告したのである。

元和八(一六二二)年八月十五日、勝成は正式に入城し城号を「鉄覆山朱雀院久松城」と命名している。そして、八月二十八日勝成自身出府して、将軍に最後の完成報告したのである。

第3回 元和偃武

偃武は偃甲ともいい、鎧(よろい)・冑(かぶと)をおさめる意味で、戦乱が終り天下が太平になることをいう。元和元(一六一五)年の大坂夏の陣をもって大きな戦乱があとを絶ち、その後、二五〇余年間、徳川幕府の太平の世がつづいたことから年号

をとって元和偃武といった。こうした世情が安定しかけた元和五(一六一九)年に、「西国の鎮衛」の任を負って大和郡山から備後福山の領主へと転封を命ぜられた水野勝成は、海陸の交通に至便な野上村常興寺山を城地に選び翌年、幕府の許可を得て新城築造に着手する。家老中山将監重盛を惣奉行に重臣小場兵

左衛門利之らを土工奉行に任じ、勝成自らも常興寺山麓の城北に仮寓して築造の指揮をとったと伝えられている。そして大工・左官の棟梁として福井藤兵衛正次・渡辺長右衛門吉次・宇野信正のちの和泉屋又右衛門や和泉屋九郎兵衛らを京都から招き、鍛冶・金具師・石工・木挽等の職人を領内の各地から集めたといわれている。

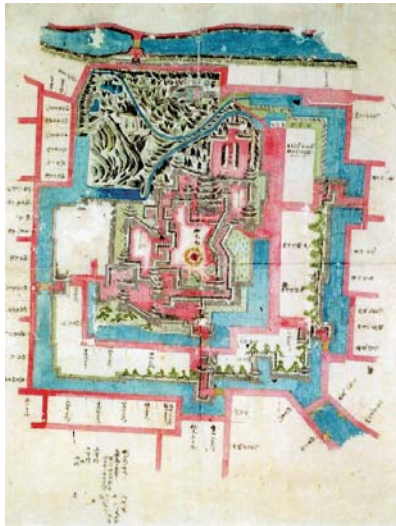
当時丘上にあつた常興寺は、神辺から移して城の鬼門守護にあてた胎蔵寺と合併し、釈迦牟尼仏や脇持もここに移した。現在、伏見櫓の南側にかつて続いていた支丘の「榎木谷」にあつた惣堂八幡社(東の宮)を城下の「宮の小路」(延広町)に移した。また、現在の備後護国神社のある山(松山)にあつた若宮八幡(西の宮)も同じく城下の「大杉」(現在霞町の西端)に移建した。現在ある福山八幡に両社が移されたのは、四代藩主水野勝成時代であつた。このようにして、城地は整えられ、本庄にあつた明王院円光寺の住職宥将に命じて地鎮祭が行われたのである。その後、宥将は城下の神島町に明王院を建立して、この明王院が草戸にある古刹常福寺と合併し、現在の明王院となったのである。

縄張りがほぼ定まると城郭の普請が急

がれた。石材は、近辺の古城に残る石垣を取り崩す一方新たに石切場から調達した。福山湾沖の笠岡に浮ぶ北木島などから、海路舟で運び、吉津川を遡り龍興寺の下で積み降ろした。ここから城山まで運んだようである。城地は東・南・西の三方を削り、山頂を削平し、石垣を積み、内外二重の堀を掘り込み、これらの土砂は城下町の埋立てに使われた。

築城にあたっては領内の村々から多くの人が駆り出されたことだろう。こうして元和六(一六二〇)年のはじめに着手された城地の調整は工事を急いだ甲斐あつて年末にはほぼ完成し、暮には城地普請大成の報告が幕府に出され、翌元和七(一六二一年)からは作事に移り、諸々の櫓建築に取りかかった。その結果、一年半後に完成をみたのである。

元和八(一六二二)年八月十五日、勝成は正式に入城し城号を「鉄覆山朱雀院久松城」と命名している。そして、八月二十八日をもって最後の完成報告を勝成自身出府して将軍に報告したのである。



福山城古絵図
水野藩時代の古絵図で幕府が諸大名に提出させた正保の城絵図に次ぐもの。古絵図に特有な濃彩描画であり、水野藩家老であった小場兵左衛門利長が作製したもの。



歌川貞秀の版画に描かれた福山城
手前に入川に架けられた天下橋を大きく描き後方に福山城を配している。

中国新聞 2004(平成16)年6月27(日)掲載原稿

備後史
スヌメ
④
第13部 福山城物語

福山城は「鉄覆山朱雀院久松城」と命名された。この「陽」は南を意味する。つまり芦田川鉄覆山は全開の背面をの南にそびえ立つ城の鉄板で覆って、極め手のとを文学的表現でいった。敵が幾度押し寄せようとも追いつくという意。また、山号の朱雀院は、中国の四神思想で南を守護する鳥である。また、山号の朱雀院は、中国の四神思想で南を守護する鳥である。また、山号の朱雀院は、中国の四神思想で南を守護する鳥である。

西国の鎮衛 防御堅固「鉄覆山」の名

本丸に入る正式な登城門である筋鉄御門。扉板には防御のため鉄板を打ちつけている。

福山城は、西国で最も歴史ある城である。西側の現在史博物館がある。福山城は、西国で最も歴史ある城である。西側の現在史博物館がある。福山城は、西国で最も歴史ある城である。西側の現在史博物館がある。

第4回 西国の鎮衛

勝成は福山城を「鉄覆山朱雀院久松城」と命名したことは、前回述べた。鉄覆山は天守閣の背面を鉄板で覆って搦め手の防御としたのでこの名をつけたともいわれるが、敵を追う「敵追山」意味を込めたものであった。敵が幾度押し寄せようとも追いつくという意味である。また、山

号の「朱雀院」は、中国の四神思想で南を守護する想像上の鳥であり、南に向いた城郭を意味する。最後の「久松城」は、松寿長久の意をこめて、城の武運長久を祈って名づけられたものとされている。

一方、葦陽城という呼称もある。「葦」は福山の母なる川である芦田川のこと。「陽」は南を意味する。つまり芦田川の南に聳え立つ城のことを文学的表現でい

ったものだろう。菅茶山の弟の菅耻庵や頼山陽は漢詩に好んでこの表現を使っている。

天守閣は、江戸時代城郭建築では戦国以来建てられた最後の最も完成された姿で、優美で均整のとれた姿は武備一辺到のものでなく建築的にも名城であった。

城郭の最上段が本丸で、天守閣は同じ本丸内にあった城主の居館である伏見御殿との間は堅固な練堀で仕切られており、また天守曲輪も形成されていた。本丸内にはこの他にも、月見櫓・鏡櫓・伏見櫓・鐘櫓・湯殿など十四棟の建物と、四棟の門が要所要所に配されていた。

二之丸は、本丸の一段下の平坦地である。大追手御門から筋鉄御門の間には西帯曲輪外側の石垣につながる一列の石垣が築かれており、本丸の石垣と合わせて都合三重とし、大手を一段と堅固なものとしていた。そして神辺一番櫓のほか鐘櫓・鉄砲櫓など十三の建物と東上り楯御門など八棟が配されていた。

内堀と外堀に挟まれた平地が三之丸である。東側の東御門と北御門に挟まれた平地が御屋形であり、二代藩主水野勝俊の時に建築されたもので以降、藩主の居館となった。当初は、御上屋敷と称していたが、阿部氏二代藩主正福の時から御

屋形と改称した。本丸内の伏見御殿は、勝成一代の居館であった。御屋形の北には、御用屋敷や馬場となっていた。

西と南側は家老屋敷である。西側の現在県立歴史博物館がある一帯は勝成の隠居屋敷であったが、勝成卒去後に筆頭家老の居邸となった。貞享元(一六八四年)の絵図では、上田玄蕃直重の嫡男で水野姓を賜った筆頭家老水野玄蕃直次の屋敷となっている。松平時代は筆頭家老山田主水、阿部時代では城代家老佐原作右衛門の屋敷に当てられている。南側は水野時代には、中山外記・上田勘解由、三村右近が、阿部時代は下宮・内藤・高滝氏などの家老が居住している。

福山城は、西日本で最初に配置された十萬石の譜代大名の城郭である。規模としては、三十萬石に匹敵する七万八、〇〇坪(二五七、四〇〇m²)の名城であり、文字通り「西国の鎮衛」としての任務を負ったといえよう。



正保年間の福山城絵図

幕府が各藩に命じて作成させ提出させた城絵図で、備後福山水野美作守(二代勝俊)居城とある。城郭内部は細密に細密に描いているが、櫓の名称はなく石垣・堀の規模が注記してある。

備後ゆゑ

ススメ

⑤

第13部 福山城物語

井靖の小説に『あすなろの城』がある。「明日はヒノキになろう」と念願しても永遠に檜にはなれない。東北青森県あたりに自生する日本特産のヒノキ科の常緑喬木である。別名をヒバともいい、昔から建築用材として用いられている。



アスナロの城 天守閣や櫓より堅固に

戦災前の福山城天守閣。最上階の廻縁が板で囲ってあるなど、現在の天守閣とは違う

（福山城博物館学芸員 園尾 裕）

門、東に東御門と北御門、西に西御門と水ノ手御門（埋門）、北には御蔵口御門（長屋門）、東に東上り櫓御門の五門を配して、正門とし、西に扉御門、東北に榎木御門の三門を配した。二の丸は、本丸より一段低い帯曲輪で四角を囲み、南に正門の鉄御門を、西に西坂口御門と水ノ手御門埋門、北には御蔵口御門（長屋門）、東に東上り櫓御門の五門を配して、正門とし、西に扉御門、東北に榎木御門の三門を配した。

南に筋鉄御門を正門とし、西に台所御門、西北に榎木御門の三門を配した。二の丸は、本丸より一段低い帯曲輪で四角を囲み、南に正門の鉄御門を、西に西坂口御門と水ノ手御門埋門、北には御蔵口御門（長屋門）、東に東上り櫓御門の五門を配して、正門とし、西に扉御門、東北に榎木御門の三門を配した。

内堀は二の丸の西・南・東の三方を囲み、その外側に三の丸があり上級の侍屋敷となっていた。三の丸を囲む外堀も内堀同様北側はなく、丘陵を切通した崖からなり石垣もなかった。三の丸は南に大手門、東に東御門と北御門、西に西御門を配し、それぞれ枳形を伴った櫓門形式の厳重なものであった。

天守閣は、外観五重で、内部は六階、一階は天守台上に半ば埋もれた半地下となっていた。また、天守南面には一重二階の付底があり、東南角には二重三階の付櫓を設けて小天守を構成していた。福山城天守閣は、大小二つの櫓が連結した複合天守であり、各所に千鳥破風と軒唐破風で飾った優美な姿であった。天守の東・南・西の三面は白漆喰の塗籠で、窓には銅板が巻かれていた。北面は、搦め手の弱点を補うため総鉄板張りであった。最上階は高欄付きの廻縁が回らされていた。内部の構造は天守建築では進化しており、

柱はそれぞれ二階分ずつを通柱とし、中央部には二本の心柱を最上階まで通していた。最上階は西北隅に御調台と称した上段の間があり、四・六階には床の間に付け、さらに当初は各階に天井が張られていたらしい。

さらに創建時は、第四重の屋根を檜皮葺とし、その他を瓦葺としていたと考えられる。風雨による腐朽を防ぐため、総瓦葺に改められたのは江戸中期頃である。また、最上階の廻縁は、板で囲ってあり斜めの跳ね上げ戸を付ける構造となっており、現在の再建天守とは違う。

福山城は櫓の多い城であった。三重櫓が七基、二重櫓が十六基あり、城郭でも最も厳重な防備施設といえる多聞櫓は、本丸と二の丸に配されて東南部を除いてほぼ四周を囲んでいた。その総延長は二百九十一間余（五七〇メートル）にも及んだ。三百間近い多聞櫓は全国の城郭でもまれな規模であって、十万石の大名の居城としては破格の巨城であった。

第5回 アスナロの城

作家井上靖の小説に『あすなろ物語』がある。「明日はヒノキになろう」と念願しても永遠に檜にはなれない。東北青森県あたりに自生する日本特産のヒノキ科の常緑喬木である。別名をヒバともいい、昔から建築用材として用いられている。淡紅を帯びた黄褐色の木で、芳香があり

脂性が強く耐水湿性に富み、白蟻予防にも効果がある。福山城は、天守閣をはじめ櫓などの多くにこのアスナロを使っている。福山城は、低い丘を利用した平山城に分類されているが、三の丸との比高差は僅かに十数m程であり、平城と言ってもよい。本丸北部に一段高い天守曲輪をつくり、南には伏見御殿が建ち並び、入口は、



かつての天守閣五階内部
奥は御帳台で上段の間になっている。中央の柱
は心柱である。



東南から見た戦災前の福山城天守閣
最上階の廻縁は、板で囲っており斜めの跳ね上げ戸が
付いており、現在の天守とは違う。

第6回 伏見城からの拝領建物

伏見城は、京都市伏見区桃山町二ノ丸
 一帯に所在した城で、標高一一〇メートルの丘
 陵に築かれた総構え式の近世城郭である。
 文禄元（一五九二年）、豊臣秀吉の隠居屋敷
 として普請された指月城が始まりであるが、
 四年後の大地震で悉く倒壊した。大震災後、

秀吉は指月から木幡山にかえて伏見城は再建され、慶長二（一五九七）年五月、天守をはじめ殿舎が完成し、秀吉・秀頼父子が移住する。

その後、船入・学問所・茶亭も完成し、城下の整備とともに中央政治の場となったが、翌年秀吉が伏見城で逝去すると、徳川家康が人城し、徳川政権への大きな

中国新聞 2004(平成16)年7月18(日)掲載原稿

備後史

スヌメ ⑥

第13部 福山城物語

伏見城は、京都府伏見 区桃町二ノ丸一帶に所

在し、城で、標高二〇〇 呎、關ヶ原の戦に立つ攻防

の要に築かれた総構 式の新世城郭である。

一五九二(文禄元)年、 豊臣秀吉の應福殿とし

て普請された指輪城が 始まりであるが、四年後の

大地震でここを倒壊 再建する。そして伏見城

は、大震災後、秀吉は指 城に本拠を移すと急速

所へ、其後、船入・宇閑 九年半も完成し、城下

の整備とともに中央政 後に、廃棄されたもの

吉が伏見城で逝去す る。

このように時代育の 銀子三百八十貫目の拝借 なくては野勝成は、福島 を許し、伏見城諸建築を 正則頼村の跡を受けて備 下賜して移築させた。後 福山の領主として新城 旗本の花房(家守)作 里に於たつたので、戸 川上土守を石垣奉行 配置された最初の諸代 名であつたため、發城に 是は、許可以外の工事と 名であつた。幕府もこの 要否を構へることを監視 する。

小丸 一万三千六百間、 丸および本丸の建物

「松ノ丸ノ東やぐら」の文字が陰刻された 伏見櫓の梁

本格的な復旧工事を施し 再建する。そして伏見城 は、二条城とともに家康

の居城として、西日本支 配の拠点となり、駿府

に伏見城の地位は衰え 一六一九(元禄三)年

所へ、其後、船入・宇閑 九年半も完成し、城下

の整備とともに中央政 後に、廃棄されたもの

吉が伏見城で逝去す る。

能舞台は、元々組合立 式での移動可能な構構 階櫓・同火打櫓・同月見 櫓・鉄御門・追手御門・ 三門・廻舞台十間・構 三基・能舞台・本丸御殿 御殿等とある。

「列記すれば、松ノ丸三 階櫓・同火打櫓・同月見 櫓・鉄御門・追手御門・ 三門・廻舞台十間・構 三基・能舞台・本丸御殿 御殿等とある。

守閣東北部で、名古屋丸 の北側に接した廻曲櫓 であつた。現在福山城本 丸内に現存するものは、 三階櫓(伏見櫓)と鉄御 門(筋鉄御門)のみであ

り、現存していないが、二階南側の材に松 伏見櫓・月見櫓・御殿 殿(この二棟は現在外観 復元として再建)などが

本丸内に移築されたもの

「松ノ丸ノ東やぐら」の文字が陰刻された 伏見櫓の梁

本丸内に移築されたもの

「松ノ丸ノ東やぐら」の文字が陰刻された 伏見櫓の梁

本丸内に移築されたもの

本丸内に移築されたもの

「松ノ丸ノ東やぐら」の文字が陰刻された 伏見櫓の梁

伏見城からの拝領建物

三階櫓・鉄御門など現存

(福山城博物館学芸員 國尾 裕)

足固めとなった。慶長五(一六〇〇)年、関が原の戦に先立つ攻防で、大坂方の石田三成らの攻撃をうけて徳川方の鳥居元忠らは、敗死、あえなく伏見城は落城した。翌年になって家康は、本格的な復旧工事を施し再建する。そして伏見城は、二条城とともに家康の居城として、西日本支配の拠点となるも、駿府域に本拠を移すと急速に伏見城の地位は衰え、元和五(一六一九)年、伏見廃城が決定され、同九年家光の將軍拜任式後廃棄されたのである。

このような時代背景のなかで水野勝成は、福島正則転封の後を受けて備後福山の領主として新城作りにあたるのである。水野家は西日本に配置された最初の譜代大名であったため、築城にあたっては幕府もことのほか配慮したようである。小判一二六〇〇両・銀子三八〇貫目の拝借を許し、伏見城諸建築を下賜して移築させたほか、旗本の花房志摩守・戸川土佐守を石垣奉行としてまた、小幡勘兵衛を絵図画師に派遣してきた。これは、許可以外の工事と要害を構えることを監視する目的でもあった。

徳川秀忠は、伏見城松ノ丸および本丸内の建物の一部を下賜し、長谷川式部少輔、水野河内守に命じて福山まで運ばせたという。では、伏見城から移築された建物

はどのようなものだったのだろうか。列記すれば、松ノ丸三階櫓・同火打櫓・同月見櫓・鉄御門・追手御門・多門・廻塀百八十間・橋三基・能舞台・本丸御殿・御湯殿などである。

松ノ丸は、伏見城の天守閣東北部で、名古屋丸の北側に接した郭曲輪であった。現在福山城本丸内に現存するものは、三階櫓伏見櫓と鉄御門(筋鉄御門)のみであり、いずれも国の重要文化財に指定されている。なお、現存していないが、火打櫓・本丸御殿伏見御殿、月見櫓・御湯殿(この二棟は現在外観復元として再建)などが本丸内に移築されたものである。能舞台は、元々組み立て式の構造で、随時、本丸・三の丸、下屋敷の御茶屋などで使用していたが、寛永ころに四代藩主水野勝種が頼の祇園社沼名前神社に寄進して以来固定式の舞台となった。

伏見櫓は昭和二十年代末に解体され、文化財としての調査がなされ、保存修理を経て現在に至っている。それまで伝承として伏見城から移建されたものと思われていたが、二階南側の梁材に「松ノ丸ノ東やぐら」と陰刻されているのが発見され、伏見城の遺構であることが証明されたのである。



福山駅新幹線ホームから見た伏見櫓



伏見櫓の梁に陰刻された「松ノ丸ノ東やぐら」の文字

水は人々の生活で欠くことのできぬ大切なものである。城下町づくりにあたり、水野勝成が一番気にかかったのは、その土地が干拓地であり、飲料水にこまることであつた。そこで町割を行うと同時に、その町々に芦田川から分水して、清流を町中に引き、これを飲み水やすすぎ用の

『宗様御出語』という勝成隠居後に書かれた記録には、「ある時勝成公が御城下の侍町をお通りなされた時、お駕籠の者が水道の上を通ったのを見て、この下には家中の侍たちの飲む水道があるのだからどうしてその上を通ったのか。勿体ないことである。脇を通りなさいと言って、自ら水をいただかれた。それから、左

右の脇ばかりを通られるようになった。」とあつて、勝成の上水道に対する想いが知れる。また、『福山領分御伝記』によれば、町人町にも上水道は暗渠付設されていたことが記されている。

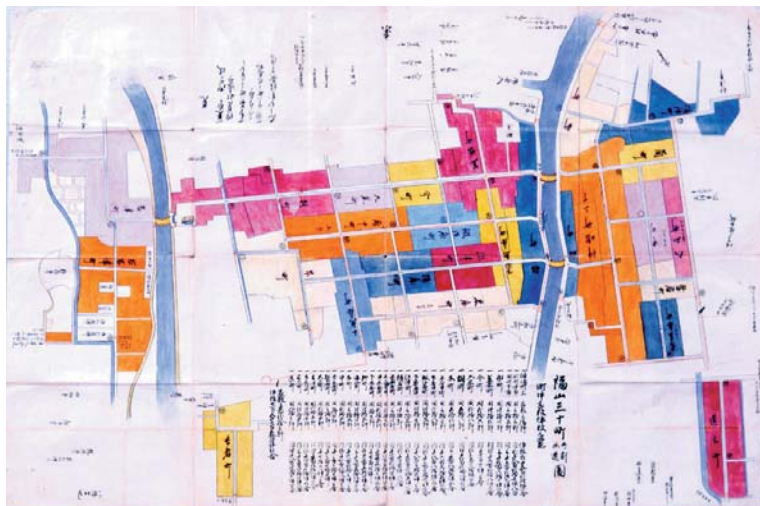
ところで、城下町の飲料水を主目的とする水道のなかで、福山上水道は、江戸神田上水（一五九〇）、近江八幡水道（一六〇七）、赤穂水道（一六一六）、中津水道（一六二〇）に次いで全国で五番目（一六二二竣工）に敷設されたものである。福山城下町はその大部分が、海底に土砂の堆積して出来た、沖積平野であるから、元来塩分の多い水で、飲料には不向きであった。また、勝成は城下の南方地先を干拓して、耕地を拓げる計画も当初から考えていたことだろう。では、どのようにして勝成は城下に上水道を敷設したのだろうか。

水源は芦田川の水であり、本庄村「良の鼻」から分水して天神山と妙徳寺山の間を掘り切つて流した。しかし、元和六年の大洪水で工事は一頓挫しその後、さらに上流の「高崎」に取入口を設け、芦田川と高屋川の合流地点から芦田川と平行した分流をつくり、本庄村「二股」で上井手と下井手に分け、さらに下井手を本庄の蓮池に導いたのである。そして蓮池一般にどんどん池というから、天神山と永徳寺山現在の福山八幡宮のある丘陵と

の間を流した。蓮池を貯水池として、ここから外堀へまた城下町へ導水したのである。

取水口は全部で四カ所あった。まず、蓮池のすぐ南から取水し、西町の武家屋敷からさらに城の南側にまわり、大手門の前から神島町を通り、奈良屋町・医者町・大工町・藺町・新町・福徳町の方へ延びるルートと、護国神社と城との間を掘り抜き現在の三蔵稲荷神社西北に取水扉門を築き、外堀北・東側に石敷暗渠を敷設して、城東の町人町へ配水のルート。やや遅れて出来た蓮池西側の松林寺北から取水して長者町筋へ給水するルート。残りひとつは、城北の古吉津の妙政寺前に取水扉門をつくり、古吉津町を石畳暗渠で東進し、吉津町は土管を埋設し、各寺院や民家に給水し、法真寺北側水路に放水したのである。これら四カ所の取水口から導水した上水の幹線は、石敷から木管や土管などの配管によって町屋敷をめぐり、数十カ所の要所に井戸状の貫洞を設けていた。各家には、幹線から竹管で導水した。

元禄ごろに書かれたと考えられる「福山三十町町割水道図」には、藩府直轄工事で水道を敷設した所を赤線で、その後、町方で分水した所を青線で記している。



福山三十町割水道図
赤線は藩府直轄工事で、青
線はその後町方で分水したも
のである。



福山市内の旧城下町から出土した、
上水道に使用された木製の桤と木管。

第8回 福山と命名

城郭の築城と相まつて城下町づくりも進められた。勝成が刈谷や郡山から連れてきた旧家臣は、わずかに百余人に過ぎなかった。『水野家分限帳』によれば、十萬石に相応しい家臣の数は最終的に二千数百名に及んでおり、福山で新規に召抱えられた者がいかに多かったかがわかる。一方、武士以外にも移住してきた町人も

『福山領分御伝記』は、「当町場荒地の、遠干潟に御座候ところ、町並銘々器量次第、敷地を開き住居仕候は、地子諸役等永々御除地に仰付かるべき候由、之により御領分は申すに及ばず、近国所々より相集まり、銘々沼、芦原を埋め、町並家作り出来申候」と、城下町づくりに備後の人々がいかに協力してつくりあげていったかを記している。

中国新聞 2004(平成16)年8月29(日)掲載原稿

備後史
スヌメ
⑧

福山と命名

銅産出の宝山に由来か

[illegible]

まず武家の町を城の周囲、東、西、南の三方にとり、寺院、神社を城背と寺町に集めた。全国の城下町の多くは東西南北に寺院を配しているのが多い。これら寺院・神社の大建築と築地は、有事の際の出城的役目を担わされたものである。

今回は、出身地を町名にしたもののみを紹介し、その他の町名は次回に回したい。

商家はまず、草戸千軒町から引きつづいて賑わっていた神島市の住民を城の追手御門先である町の中心に全戸移して、豊表売買の特権を与えている。神島町は、芦田川の西に栄えていた市場町で、寛永ごろに上・中・下市の三町に分かれた。深津町は鍵屋甚兵衛の先祖が深津村から移住したことから、誰言うともなく自然と深津町現在の宝町と呼ばれるようになった。

また、府中町現在の城見町の一部と大黒町は長野与一郎が移住した所で、笠岡町も同様。奈良屋町現在の霞町の一部は大和郡山から勝成に従って移住してきた奈良屋才次郎・重次郎・庄次郎兄弟の住んだあたりである。下魚屋町現在の今町と笠岡町の一部に三島屋小屋の地名があったが、これも三島屋安右エ門が伊予大三島から漁師を移住させたところという。

さて、勝成は「久松城」という新城を築き、城下町を「福山」と命名した。こ

の名称の由来については、数種の説がある。

① 築城以前から常興寺山塊に福山と称す小丘があったという説

② 常興寺山は、蝙蝠山とも称していたらしく蝠は福に通ずることから寿山福海の縁起をかつぎ、町の発展を祈つてり領民の幸福を願って「福山」と名付けたという説

③ 勝成は、経済対策として全国の諸藩に魁て「菊屋札」という藩札を寛永七（一六三〇）年に発行した。続いて銀・銅貨の発行を計画し、領内の鉱脈の調査・試掘を行った。その当時、水呑村荒谷（洗谷）は中世以来の鉱山として宝山と呼んでいた。勝成はこの新しい城下町を銅が出る山すなわち宝山に対して「福山」と名付けたという説

現在では③の説が有力である。ちなみに福山の市章は福山の山と蝙蝠の形をデザインしたものである。



大正時代頃の木綿橋風景

第9回 城下町の町名あれこれ

城下町建設当初、町人町の数は、十二町であつたといわれている。この十二の町が具体的にどの町であつたかは明らかではない。城下の賑わいと経済の進展につれて、各地からの移住者も増し、町人町も発展してきた。神島町・米屋町が上・中・下の三町に、また、魚屋町・府中町が上・下の二町に分化拡大したり、新た

に町を形成したりして、水野家改易の元禄ごろには三十町になっている。これとは別に鞆に六町あり、城下と合わせ福山藩は、三十六町で構成されていた。

福山城下町は城郭の西・南・東に家臣の居住する武家屋敷が割当てられ、大きく西町と東町に二大別されて呼ばれていた。町人町は面積的には、武家屋敷の三分の一であった。そして町人町は、城の北西に長者町が配されたほかは、城の東側、



東町との間とし、入江を中心に南北二十七町に分けられた。町人町は武家屋敷で囲まれており、保護されると同時に監視もされたのである。

當時山陽道は御城下を通つておらず、神辺から郷分・赤坂を経ており、奈良津と數路を通る二つの街道は、おのおの神辺・横尾でそれぞれ山陽道に接続した。この二つの街道は途中で一つに合流して城下の吉津町に入り、惣門から一直線に、入江に架けられた本橋（天下橋）に達した。

この道の両側に本町・桶屋町・深津町・下魚屋町の商家を設けた（本町筋と称した）。これと平行して、西側に米屋町（上・中・下の三町）・上魚屋町を配し、本町筋の東に府中町（上・下の二町）・鍛冶屋町、さらに東の筋に胡町・大黒町・今町・笠岡町を置いた。この四筋に入江両岸沿いの船町を加えて内町（計十七町）といった。

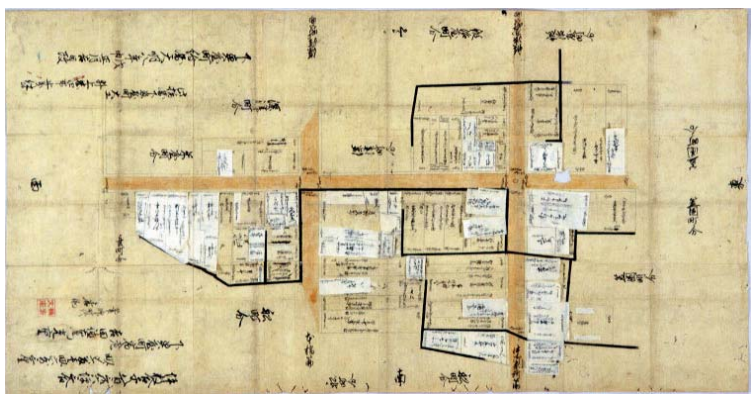
そして、本橋を南に渡つて神島中市、新橋（木綿橋）を南に渡つて神島上市、さらに神島下市・奈良屋町・医者町・中町・大工町・藺町・福德町・新町を加えて神島町（計十町）と称し、内町と神島町をあわせ合計二十七町の町家となっていた。これに長者町・道三町・古吉津町の三町を加えて三十の町人町が出来上がったのである。

主要道路には笠岡（現岡山県笠岡市）から海岸沿いに深津に入るものがあり、鞆に出る鞆街道があった。海路は入江をもつて城の堀に通じ、俗に浜川（入川）といつて、当時はのちの手城・川口などの新涯はなかったので、満潮になると城の外堀に船が入りできたが、後に築切をつくり海水との間を断つたのが築切町である。ここで、前回紹介した出身地を町名にしたものの以外をつぎに略記する。

① 職種を町名としたもの
鍛冶屋町は、鍛冶屋備後藤四郎国吉の屋敷跡があつたといわれる。桶屋町・大工町・米屋町・魚屋町・藺町・医者町は各職人の居住に因む。大工町は、道路の片方だけが町屋をなしていたので片平町ともいった。また、道三町は柿苆（かきふ）職人の集住で、三本の道筋があつたことが町名の由来となつた。

② 位置・成初期を町名としたもの
本町は、開発当初目抜き通りで最も賑やかな町であり、中町は神島町と大工町とはさまれていた。今町は、もと侍屋敷であったところが後に町屋となった。

③ 縁起をかついだ町名
大黒町・胡町・長者町。福德町など



下魚屋町の絵図 寛文九(1669)年作成の下魚屋町絵図の上に各屋敷所有者の異動を貼紙にて天明八(1788)年に改正したもの。当時の宿老は吉田清右衛門光重で、町坪数は、1836坪3合(六反一畝6歩3厘)とある。



福山市街地の一部(大正時代頃)

中国新聞 2004(平成16)年9月26(日)掲載原稿

備後史

第13部 福山城物語

スヌメ

10

「見たか、来て見たか」で従来行っていた「裸と福山の城はヨイヨイ」前「んど」が元となり、城下は総期でチョイト鯨がすけて、城下を担ぎまわった。今は「とんど」も姿を消し、この威風のよい囃し聞かれなくなった。かつては城下町から、という。そして、小正月それぞれ凝った趣向の飾りをつけたとんど(左義長の漢字並で)を提出された。その後で城下町を担いで、正月十四日の小正月から薬師(深津町)で、城下町はこのとんどを焼いたのが端緒である。

「来たか、来て見たか」福山のとんどは、福山城の完成と城下町の誕生、そして、その繁栄の喜びを祝って始められた。それまでは、深津村

とんど

城下繁栄願い練り歩き

とんどの練り歩きでにぎわう大正時代の福山の市街地

（福山城博物館学芸員 岡尾 裕）

第10回 左義長を練りだす

見たか 来て見たか

福山の城はヨイヨイ

前はお堀でチョイト鯨がすむ……

今は昔とすでに「とんど」祭も姿を消し、この威勢のよい囃しも聞かれなくなった。かつては城下各町からそれぞれ凝った趣向の飾りをつけたとんど(左義長)が担ぎ出されていた。そして正月十四日の小

正月に城下町はこの「とんど」で最大の賑わいをみせたのである。

福山のとんど祭の起源は、福山城の完成と城下町誕生と、その繁栄の喜びを祝ってはじめられた。それまでは、深津村で従来行なっていた「裸とんど」を展覧せ、城下の町々が各種の飾りをつけて、城下をかつぎまわったのが、勝成の氣に入り、毎年慣例となったという。そして、小正月の朝に東の外堀端に整列して、城

主の御覧に供し、その後で城下町を担いで練り回り、午後四時ころから薬師沖(深津町)でこれを囃して焼いたのが端緒である。

来たか 来て見たか古津のとんどヨイヨイ

上は鶴亀チヨイト五葉の松……

と歌われた吉津のとんどは、台輪の上部に鶴亀を飾り、芯の笹竹に短冊をぶら下げ、下部には大竹四本を注連縄で巻きつけて四つ足に開き、これに担い棒をつける。町内の男衆総出で担ぎ、前綱は子供たちが引いて町中を練り歩くようすが、当時の絵巻や風俗記の記載にみられる。

「とんど」は、漢字で左義長と書いているが、元来は中国の悪魔払いの行事が、平安時代に日本へ入り、朝廷で毎年正月十五日と十八日の両日清涼殿の庭で青竹を束ねて枝に扇子や短冊などを結びつけて飾り、陰陽師が謡い囃して火を掛けて爆発させたものと結びついたらしい。室町時代になると民間に広まって、正月の注連縄りで、竹を立てて足をつけ、巻き付けて担ぎ回り、最後に焼き払う行事となり、その竹の弾ける音が「とんど」といって悪魔を追払うという訳で「とんど」の名称が出たともいわれている。

この「とんど」の構造は、大きな竹竿を四本組立て足を開き、七・八分まで縄

で揉み上げ、その竿頭を合せて、あたかも尖鋒のごとくしたので、これを山と称した。台輪で四脚を固め二本の担い棒を通す。外部は太い注連縄でおおい、高さはおよそ九メートル程で、上部に松葉で作った三蓋という大皿形のものを作り、この上に鶴亀・花車・諫鼓鳥など各町それぞれ趣向を凝らした飾を付けた。その上に笹の付いた孟宗竹一本を貫いて、これに扇子や短冊を吊り下げ、下部の正面に藁額を作り、「歳徳神札など貼り、その下の棚に一人の囃手が立って音頭を唱うのである。そして町内の若者がこれをつぎ、左義長の前後左右から太い綱で倒れないように張って、町ごとに纏を立てて進んだのである。

いまから十数年前、私は、ふくや美術館建設に先立って福山城外堀の位置確認を兼ねた予定地内の発掘調査をした。石垣の基礎部である一番底は海抜マイナスイートル前後であった。勝成は、芦田川の川水を堀に導水したのであるが、満潮ともなれば十分海水魚である鰯が堀に入ってくる訳である。このとき私は素直に「福山城の堀にはチヨイト鰯がすむ」という一節を納得したのであった。



吉津町のとんど
鶴亀のとんど



笠岡町のとんど
諫鼓鶏のとんど



かつての「とんど」練り歩きで賑わう街なか
(大正時代頃)



天下橋を渡る左義長の行列

ここで、譜代大名である備後福山十万石歴代領主の概略をたどってみよう。

初代福山藩祖水野勝成は、元和五（一六一九）年、大和国郡山（六万石より入封以来、新城としての福山城郭および城下町の建設をおこない、地名を福山と定めた。ここに福山藩が名実ともに成立したことになる。その所領は、備後国七郡と備中国二郡に及び、のちに寛永三年相模国愛甲

A photograph of a traditional Japanese stone gate (torii) with a central archway and two side pillars, set against a backdrop of trees. The gate is made of dark stone and features a central archway with a small roof. The side pillars are also decorated with stone carvings. The gate is surrounded by lush green trees and foliage.

福山市寺町の曹洞宗開山地にある水野勝成の墓
 一代勝寛が版倉遷遷まで
 〇石を領し、下後國
 城城されたもので
 代勝寛が版倉遷遷まで
 出十三年正月十日の
 領十石、正弘十石の松平
 奥平 忠雄が福十萬
 石に転を命ぜられ、
 石に転を命ぜられ、
 治世後、一七〇〇、宝永
 七年に松平、伊勢國代
 名に転を命ぜられ、代
 わつて、野手都部威主
 十萬石、阿部正が福
 福十萬の領主として入封
 す。

福澤水野家は一六〇〇年八月五日、勝安が九か二歳で死した。このように、嗣子なく水野の跡を継ぎ、能登國鹿嶋・鳳至・羽作・福澤水野家は断絶した。

正教・正方・正桓と十代続いた。阿部氏は代々、大坂城代、奏者番、寺社奉行、京都所司代、老中などの幕府の要職に就

郡の内一〇〇〇石の加増をうけた。

水野家は、二代勝俊、三代勝貞、四代勝種、五代勝岑と続く。水野時代は、河川流域や海岸の干拓が積極的に行なわれ、とくに芋田川の中下流域の開発に力が注がれた。その結果、城下のある深津郡の石高は、入封から七十九年後の元禄十二（一六九八年）には約三倍に増加した。また蘭草・木綿の栽培や、畳表・木綿織の生産も盛んで、塩の生産とともに、福山藩の主要な産物となった。

福山藩水野家は、元禄十一年五月五日に勝岑が僅か二歳で死去したことによって、嗣子なく福山水野家は断絶した。しかし、先祖の勲功によって、幕府は勝成の末子勝直の長男である勝長に水野の名跡を継がせ、能登国鹿島・鳳至・羽咋・珠洲四郡の内において一万石を与え、羽咋郡西谷に居住させる。元禄十三年下総国に移され、同十六年までに八〇〇〇石加増され、一万八〇〇〇石を領し、下総国結城城主として、以後十一代勝寛が版籍奉還まで継承した。

水野家断絶によって、福山藩領は天領幕府の領地となり、代官支配が行われた。この間約三年間、三代官が入れ替わりに幕府より派遣され、三吉町の陣屋で執政が行われた。幕府は水野家断絶の後処理として、岡山藩に命じて旧水野領を検地させる。その結果、表高十萬石から実収十五萬石と査定されたのである。したがって残り五萬石神石・甲奴・安那郡および備中国の一部は幕府に没収されたのである。

続いて、元禄十三(二七〇〇)年正月十一日、出羽国山形十万石の松平(奥平)忠雅が福山十万石に転封を命ぜられた。松平氏は、わずか十年の治世後、宝永七(一七一〇)年閏八月、伊勢国桑名に転封を命ぜられ、

代わつて下野国宇都宮城主(十万石)阿部正邦が福山藩の新領主として入封する。

阿部家は、以後廃藩置県まで正福
正石・正倫・正精・正寧・正弘・正教・
正方・正桓と十代続いた。阿部氏は代々、
大坂城代、奏者番、寺社奉行、京都所司代、
老中などの幕府の要職に就き、わけても
七代藩主の正弘は、幕末の多事多難な政
治状況下で、日米和親条約を締結した老
中として全国的に有名である。嘉永五(一
八五二年)十二月、正弘は幕府から功を認
められ、一万石の加増を受け、福山藩は
十一万石となる。

一方、藩政は家老政治となり藩財政は常に逼迫し、これが貢租増徴につながり一揆を誘発した。なかでも天明一揆(天明六・七年)は、惣百姓一揆として名高い。教育面では、藩校弘道館を、のち弘道館を發展的に解消して誠之館を建設し内憂外患の危機的状况に対処し得る人材養成を図った。



水野勝成肖像画（賢忠寺蔵）



阿部正弘肖像画（誠之館同窓会所蔵）
五姓田芳柳(二世)が描いた油絵である。



水野勝成の墓（広島県史跡に指定）
水野家の菩提寺である寺町の曹洞宗賢忠寺水野公園内に祀られている

中国新聞 2004(平成16)年11月14(日)掲載原稿

第12回 堀を埋めて鉄道を

明治四年七月、廃藩置県の詔書が出され、福山藩は福山県と改称された。この大改革に伴い福山城本丸、二の丸、三の丸、及び附属地練兵場などの城郭全部が陸軍省の管轄となった。明治六年一月、全国に六鎮台が置かれ名古屋・大坂・広島・熊本などの城郭は兵営となったが、福山城は不要となり民間への払い下げられることとなった。

当時の福山は小田県といって笠岡に属していた。当時の福山は小田県といつて笠岡に属

が置かれていた。小田県では福山城の旧建物を六六別して入札したが、入札に参加する人も少なくなかなか落札には至らなかったという。そこで、県は入札方法を変更し建物一棟ごとの切売りとしたので、小建物から随時落札者が出たという。現在、鞆の保命酒店としての老舗「岡本亀太郎本店」の建物はこのとき落札した福山城の門長屋である。

城郭の建築は安価な評価額で入札に付されたらしいが、一般民家建築に比べれば規模のすこぶる大きなものであり、多

備後ゆ ススメ 12

第13部 福山城物語

「一七二（明治四）年 かれていた。小田県は七月、廃藩置県の詔書 福山城の建物を六六別が入れ、福山城は福山として入札したが、入札の用は長物」化していた。大改革に伴い福山城本丸、二の丸、三の丸、及び附属地練兵場などの城郭全部が陸軍省の管轄となった。明治六年一月、全国に六鎮台が置かれ名古屋・大坂・広島・熊本などの城郭は兵営となったが、福山城は不要となり民間への払い下げられることとなった。

当時の福山は小田県といつて笠岡に属していた。当時の福山は小田県といつて笠岡に属

堀を埋め鉄道を敷設 城郭の駅舎建設 反対も

石垣の手前が福山城の内堀。現在の福山駅や鉄道は、この内堀を埋めて敷設された

城郭の建築は安価な評価額で入札に付されたらしいが、一般民家建築に比べれば規模のすこぶる大きなものであり、多

は、基金三千円と川口の払い下げを受けて、村の荒地二十一町歩を寄付して「岡田社」を設として破産士族の救済を図った。

七年、旧藩主阿部正頼之丸および内堀・外堀が収益はさほどでもなく、依然旧藩士たちの生活は苦しかった。

九〇年七月、第一回衆議院選挙が行われ、福山の倉田幸五郎が当選した。翌年国会は解散し、総選挙が実施され、福山の倉田幸五郎が当選した。翌年国会は解散し、総選挙が実施され、福山の倉田幸五郎が当選した。

しかし、投資したお金は無駄ではなく、数十倍になつてゐる。つまり鉄道用地として福山の倉田幸五郎が当選した。翌年国会は解散し、総選挙が実施され、福山の倉田幸五郎が当選した。

（福山城博物館学芸員・岡田 裕）

くの人々はなかなか手が出せなかったであらう。落札しても、それを解体・運搬し、更に再建しなければ意味がない。まさに城郭建築は「無用の長物」と化していたのであろう。

福山城郭内のどれだけの建物が落札されたか不明である。因みに天守閣は当時の金額で二百三十円まで下落したが、誰一人として手を出そうとしなかった。これには、絶対神聖視されていた天守閣を俗人が所有して取り壊すという行為そのものに對して、崇りの恐怖を感じてのことであつたらしい。

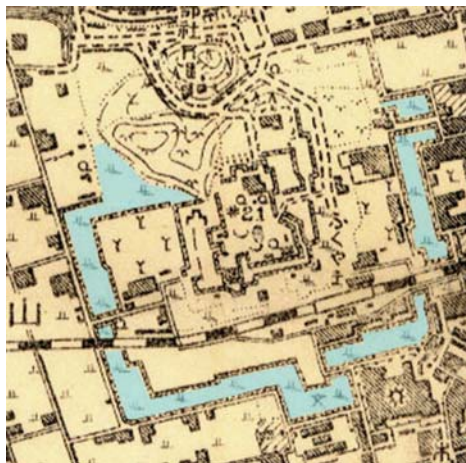
一方、旧藩士たちの生活は多くが零落していた。明治十年、かつての藩主阿部正桓は、基金三〇〇〇円と川口村の荒地二十一町歩を寄附して「義田社」を設立し、また二の丸・三の丸及び内堀外堀の払い下げを受けて、城跡は桑畑とし堀は蓮池として疲弊士族の救済を図った。

しかし、これらから上がる収益はさほどでもなく、依然旧藩士たちの生活は苦しかった。その後、明治二十五年になって、外堀全部を鞆の林半助に買わせた。これには、かなり政治的な動機から駆け引きがなされたようである。

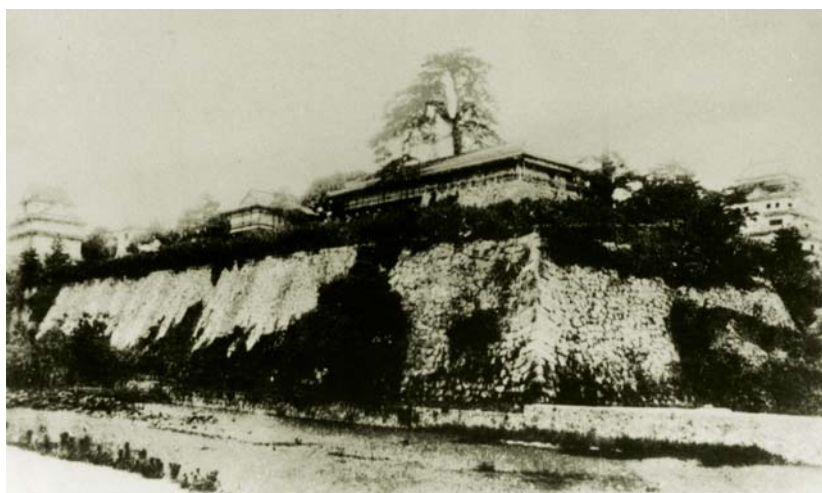
明治二十三年七月一日、第一回衆議院選挙がおこなわれ福山の倉田準五郎が当

選した。翌二十四年国会は解散し、五年の総選挙となった。この時、鞆の林半助が立候補する。福山の有権者票を得ようと運動する林陣営に對して、福山町民から林に對して、「福山城のお堀全部を買ってくれたら君の応援をしよう」という話になり、林は洪々これに応じたのである。が結果は、僅少差で林の落選に終わった。

しかし、林の投資したお金は無駄ではなく、数十倍になって帰ってくる。つまり鉄道用地として買収されたのである。当時、山陽鉄道株式会社により、東から山陽鉄道の区間開通が進んでいた。明治二十四年七月十四日には、倉敷、笠岡間が、同年九月十一日に笠岡、福山間が、さらに十一月三日には福山、尾道間が開通するのである。城下町のど真ん中へ鉄道を通し、堀を埋めて福山城郭の中心へ駅舎を建設することにかんがりの反対もあった。彼は後、この経済力にものを言わせて「鞆輕便鉄道」を開通させるのである。



形測量図に表された福山城の外堀
明治30年大日本帝国陸地測量部測量、同33年発行の20,000分の1地図には福山城の外堀(青色部分)の多くがまだ埋め立てられずに残っている様子が分か



かつての福山城内堀 現在の福山駅および鉄道はこの内堀を埋めて敷設されたものである。

明治七年九月、小田県へ各町村戸長が福山城天守閣等の諸建物と城地の無償下賜を請願した。この結果、同年十月内務卿伊藤博文から「人民偕楽の地となすべし」という条件付で許可された。更にその具体策について図面を添付して計画具申したところ、翌年一月二十五日付内務卿大久保利通より「指令通り公園となし、建造物は永遠保存すべし」との示達がなされた。

れた。

これにより本丸を中心に城地の整理をし、料亭なども設けられ、天守閣には一銭の登閣料を支払えば見学できたという。このとき東から本丸へ登れる道現在、河合塾西側からの登り口が新たに作られたらしい。これには、内堀の東側最北部を一部埋め立て、二の丸と本丸の石垣も部分的に取り壊して石段を付設して東坂道としたのである。

こうして出来た福山公園ではあったが、

天守閣の修理費に窮し、数年にして経営は困難となる。そこで明治十七年五月に広島県令千田貞暁に公園建物還納をおこない、以後広島県直営となった。明治二十一年には、本丸東南隅の月見櫓跡地へ町民有志が発起、県より借地申請し「葦陽館」と称する貸席を建設して公園の振興策としている。

一方、天守閣の修繕費に手を焼いて県へ移管した福山町であったが、その後ますます天守閣の痛みはひどくなるばかりで、明治二十八年十一月に至って福山町会は広島県知事鍋島幹に再び公園移管の申請をおこない認められる。福山町では、翌年四月一日付けをもって「福山公園保存会」を設置し会員の募集をおこない、会長に川崎宗則を、そして理事・評議員ら二十人を選出し、旧藩主阿部正桓や、井上角五郎・石井英太郎らを顧問に据えた。これらの人々からの醵金が一万円に上り、明治三十年春になって天守閣・伏見櫓・御湯殿・筋鉄御門の大修理にとりかかった。

このような福山城保存に対する地道な努力があつて、昭和六年一月十九日をもって福山城天守は国宝に指定されたのである。このとき同時に指定を受けた城郭は、姫路・岡山・広島城の各天守であつた。さらに、昭和八年二月二十三日には伏見

三層櫓・御湯殿・筋鉄御門の三棟も国宝指定されたのである。この時、同時指定を受けたのは岡山城の月見櫓・石山門(湊蔵門)と西丸西手櫓の三棟である。

ここで一言申し添えたいことがある。現在の福山城伏見櫓と筋鉄御門は、国の重要文化財である。世間一般には、かつての「国宝」が「重要文化財」になったというとランクが下がったかの印象を懷く人が多い。しかし、これは誤りである。現在の「文化財保護法」は、昭和二十四年一月二十六日に法隆寺金堂壁画が焼損したことにより、翌年五月三十日に施行された法律である。この法律により従来の文化財を集成し、ジャンルごとに組換え整理されたのである。昭和六・八年に指定されたのは「国宝保存法」という法律によったのだから全てが国宝である。



福山城公園本丸内に建立された阿部正弘の銅像
銅像は、戦時金属回収で撤去され、鑄潰され兵器となっ
た。台座は福山出身の日本的な建築家武田五一の設計
であった。



中国新聞 2004(平成16)年12月12(日)掲載原稿

第14回 福山城再建

昭和二十年八月八日、福山城はアメリカ軍のBの空襲によって、天守閣・御湯殿などの建物と福山市街地のほぼ八割が灰燼と帰した。福山の郷土史家で備後郷土史会の会長であつた得能正通の娘千代子さんは、『福山戦災 あだの火の雨』のなかで「……お城が、あのなつかしい久松城が、紅蓮の焰に包まれ城の形のまゝ、

火になつてゐる。ああ何百年の歴史が瞬く間に無くなつてゆく、宮も寺も学校も……」と書き記している。（『福山市史』下巻より）

私は当時の惨状は生まれていないため知る由もないが、現在残されている福山城郭の石垣にその証を見ることが出来る。つまり、焼夷弾を落とされ炎上した建物が焼け崩れて地上に落ちる。その炎が花崗岩の石垣を炙り、その高熱により四角



な花崗岩は角が取れシャープな稜線を描いていたものが丸くなり、表面は剥離し全体に赤みを帯びた色に変化しているのである。

この様な石垣は、ＪＲ福山駅北口を出た直の所にある。二の丸を構成する高い石垣である。その南と噴水の上がつている東側かつての内堀跡に面するの状況を見れば誰しもこの福山空襲の悲惨さを感じることであろう。また、天守閣を支える天守台の石垣にもこのような痕跡は多く見られる。まさにこれらの福山城石垣は立派な戦争遺跡といえよう。

戦災の痛手からまだ復興できていない昭和二十二年五月、福山産業復興博覧会が一月間開催された。福山駅前の元三菱第一工場跡地が、第一会場となり産業館に、福山城跡公園が第二会場として市民の芸術文化の殿堂となった。焼失して石垣だけになっていた天守台に日本風殿舎を仮設し、茶華道各流派の展示や茶席など開かれていた。また、焼失を免れた伏見櫓は美術館として、戦後初めての美術展示がなされている。

昭和三十六年に福山市は日本鋼管福山製鉄所誘致に調印し、以後次第に人口の増加を来した。さらに昭和四十一年には、福山市と松永市の合併がなされ、新福山

市の誕生となる。この年は、福山市制五十周年の記念すべき節目であった。日本鋼管福山製鉄所や福山商工会議所などの経済界の主導のもとに、多くの市民が参加し浄財を醸金して、福山城天守閣が再建されたのである。天守閣のほかにも月見櫓と御湯殿も再建された。

城地は昭和三十九年二月七日付で国史跡に指定されており、鉄筋コンクリート造りの近代建造物の再建は文化財保護の観点から文部省の許可を得るのにかなりの苦心があつたようである。

ともあれ、天守閣は無事外観復元されその優美な姿を再び福山市民の前に現したのである。そして、内部は福山市立の博物館として利用することに位置付けられたのである。翌昭和四十二年九月二十八日には国の登録博物館となり、郷土福山を中心とした歴史と文化を紹介し多くの文化財も公開している。福山城博物館は開館以来、今年で三十八年になる。その間現在までに一三八回の特別展・テーマ展などの企画展を開催している。

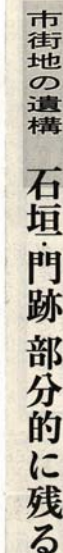


天守閣再建工事中の航空写真

福山城を訪れる観光客のおよそ九割の人が口を揃えてよく言われる。「福山城は駅から近くていいですね」また、「いつも新幹線の車窓から福山城の天守閣を眺めていましたが、来てみると本当に近いですね」という言葉である。

の中に駅があるんですよ」と教えてあげる。そして、全国的に見ても、城の中に駅があり、鉄道が貫通しているのは福山城と三原城の二つぐらいではなからうか。しかもいづれも広島県内である。明治二十年代半ば頃に山陽鉄道を敷設したときのいゝろんな事情があつてのことだろう。

現在、福山城の内堀と外堀および外堀に続く入江はすべて埋め戻され、たくさ



の中に駅があるんですよ』と教えてあげる。

んあった櫓も取り壊され、これらの上に
 民家や商店・ビルなどの建物が軒を連ね
 市街地と化してしまっているのである。
 そして、わずかに残っているのが本丸と
 二の丸のみである。福山市民でさえ天守
 閣だけが福山城と誤っている人も多いの
 である。

私は城を構成する三要素は、「石垣」
 「堀」「水」であろうと思う。地上にか
 つての櫓や門などの建物は失われていて
 もこれら三つの存在があれば城とか、城
 下町といった雰囲気は充分に醸し出すこ
 とが出来ると思うからである。

最近福山城のすぐ東下に天守閣より高
 いマンションが建設された。この場所は
 江戸時代「御屋形」とよばれ藩主の日常
 生活の場である居館があった場所である。
 福山が都市化した証として高層マンシヨ
 ンの登場を歓迎する人もいるだろう。「福
 山城を伝える場所が、資産価値となる」
 マンション分譲の広告に記された文句で
 ある。福山城風致地区として、景観を損
 ねたと感じる人も多いことも事実である。

さて、この市街地の中に福山城郭の遺
 構が部分的であるが散策できる。まず、
 外堀から三の丸に入る門跡が二箇所ある。
 広島県立歴史博物館西南のJR福塩線高
 架下にある「西御門櫓台跡」と、丸之内

一丁目の鈴木工務店北側民家の外堀となつて残されている「北御門外櫓石墨跡」である。両方とも福山市史跡に指定されている。

サントーク名店街北側にある市営駅北口駐車場内に南北数m保存されている石垣列と、そのすぐ北側にあった旧備後通運社屋があった基礎石垣の一部である。いずれも東外堀内側の石垣であり、後者は外堀に面する「物見櫓」が建っていた場所であり、「北御門外櫓石墨跡」から南へ続く重要な場所である。

ふくやま美術館・広島県立歴史博物館の建設やこれらに伴つて整備された道路拡幅・パークロードや、市営三之丸立体駐車場建設など一連の文化ゾーン整備事業でそれぞれの個所が発掘調査されている。これらの場所は西外堀の内側石垣列が地下に残存していることが確認された。美術館南側駐車場や県立歴史博物館周辺には地上に矢印の刻された石柱を埋設し、これらの解説亜鉛板パネルを三箇所設置してある。

三之丸立体駐車場の南西部からは、西御門櫓台跡から南へ延びさらに東へ折れた南へと続く西外堀内側の石垣列が見つかり、駐車場地下に保存され歩道から見学も出来、説明板も取り付けられている。



福山城の遺構表示説明板
福山城の西外堀石垣のラインを示す解説。美術館西南のパークロードの植込み内。

三之丸立体駐車場建設に伴って
発掘調査された福山城西外堀の
石垣。

あとがき

福山城は駅に近くていいですね。観光客の多くが口を揃えてよく言われる。全くその通りである。全国に残っているこの城も完全な姿で残っているものはまずない。天守閣は城郭を構成する最も重要な建築物であるが、これがお城であると思っている人が意外に多いのが現実である。私は、そういった思いが何に由来するのだろうか常日頃から自分なりに考えている。

城郭を構成する三要素を、自分勝手につぎのように考えている。それは、「堀」「水」「石垣」の三つであろう。この三要素が揃ってこそ城郭、そして城下町の雰囲気味わえるのではなからうか。このように考えると、「福山城」に欠けているものは、「堀」と「水」であろう。

当時、中国新聞備後本社より「備後史ノススメ」に福山城のことについて連載記事を書いて欲しいという依頼を受け、読み切りのテーマを私なりに考え、僅か二週間ほどで十五回分を書き上げた。

連載は五月から十二月の長期に亘ったが、多くの人から「興味深く読んでいますよ」との声を頂いた。有難いことだと感謝している。私なりに福山城をより理解していただく案内書になればとの思いを込めて書いた積りである。

二〇二二（令和四）年、福山城築城四〇〇年記念の年に向けて、福山市議会議員 岡崎正淳氏によって、この連載記事をホームページへ掲載していただくこととなりましたこと、心より感謝を申し上げます。

より多くの方々に福山の歴史を知っていただき、「福山城」の手引書・案内書の一端を担うことが出来れば、喜びとするところです。

二〇二〇（令和二）年六月

園尾 裕

付録

在りし日の福山城

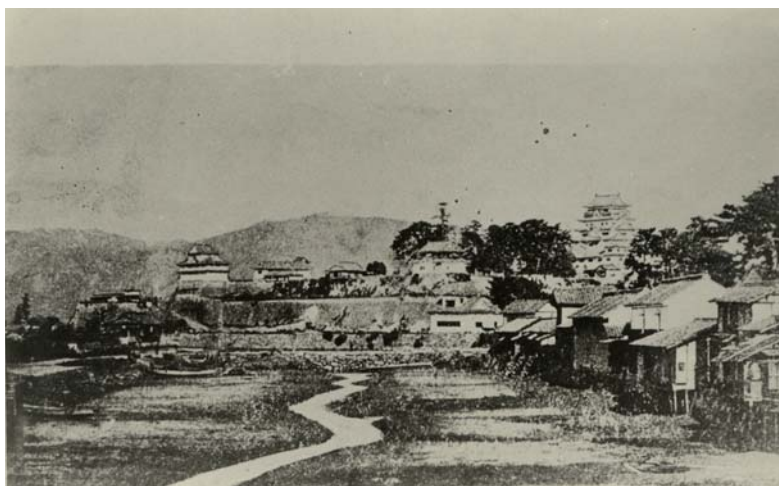
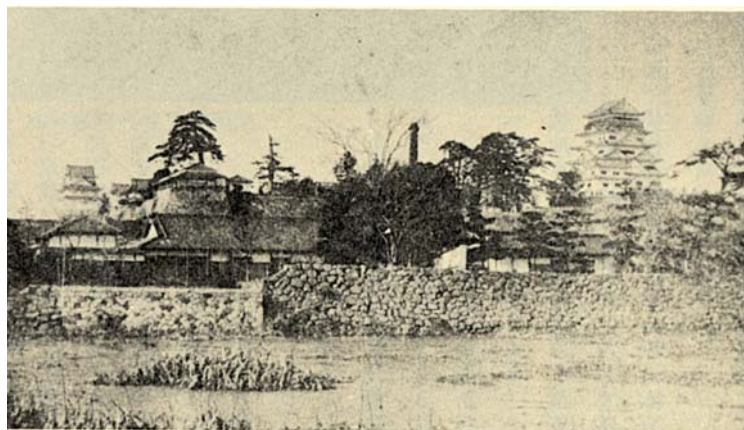
福山城は元和五年（一六一九）徳川譜代の臣、水野勝成が十万石の領主となり、ここ福山に城を築いてから福山の城下町としての歴史が始まり、その後水野氏五代、代わって松平氏、阿部氏十代と廃藩置県にいたるまで、福山城が藩治の中心となった。

明治六年廃城となり天守閣、伏見櫓、鉄筋御門、湯殿をのぞいて、ほとんど取りこわされた。しかし昭和二十年の戦災により天守閣と湯殿、月見櫓が復元された。

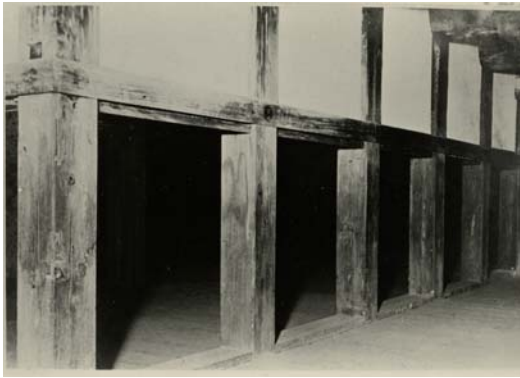
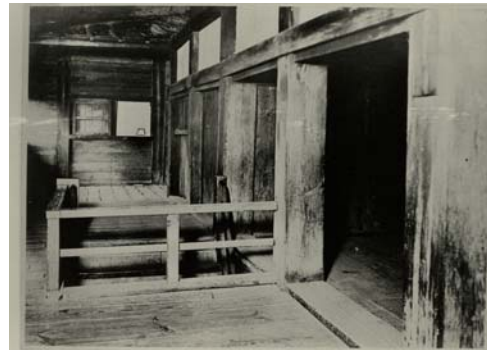
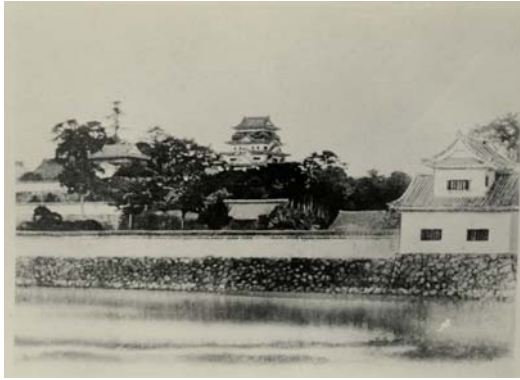
幸い焼失をまぬがれた伏見櫓、鉄筋御門は昔日の姿を止め国の重要文化財に指定されている。

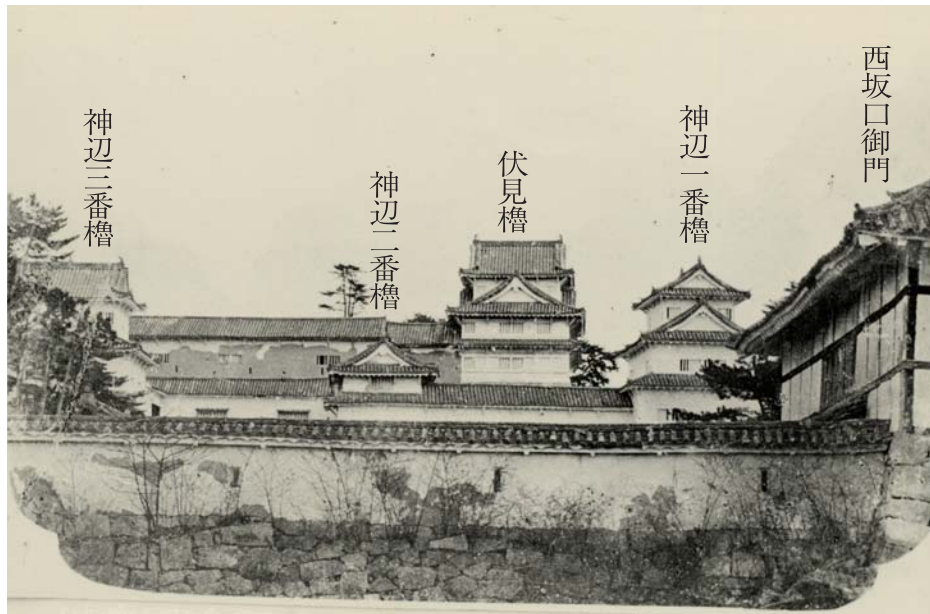
福山城は近世築城の最後のものとしてその完成された築城術の粋をほこるもので、全国城郭屈指の名城とたたえられた。

（福山城「今と昔」から抜粋）

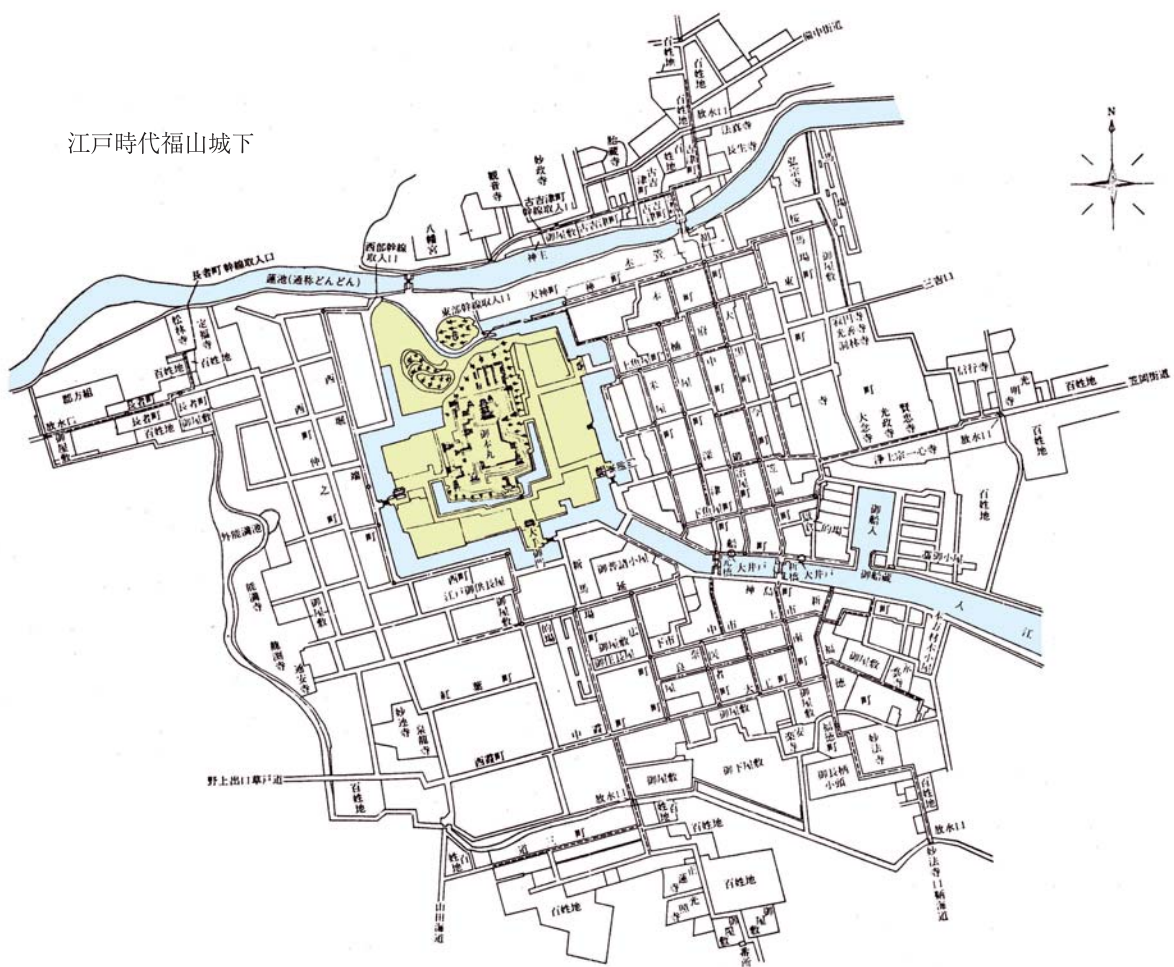




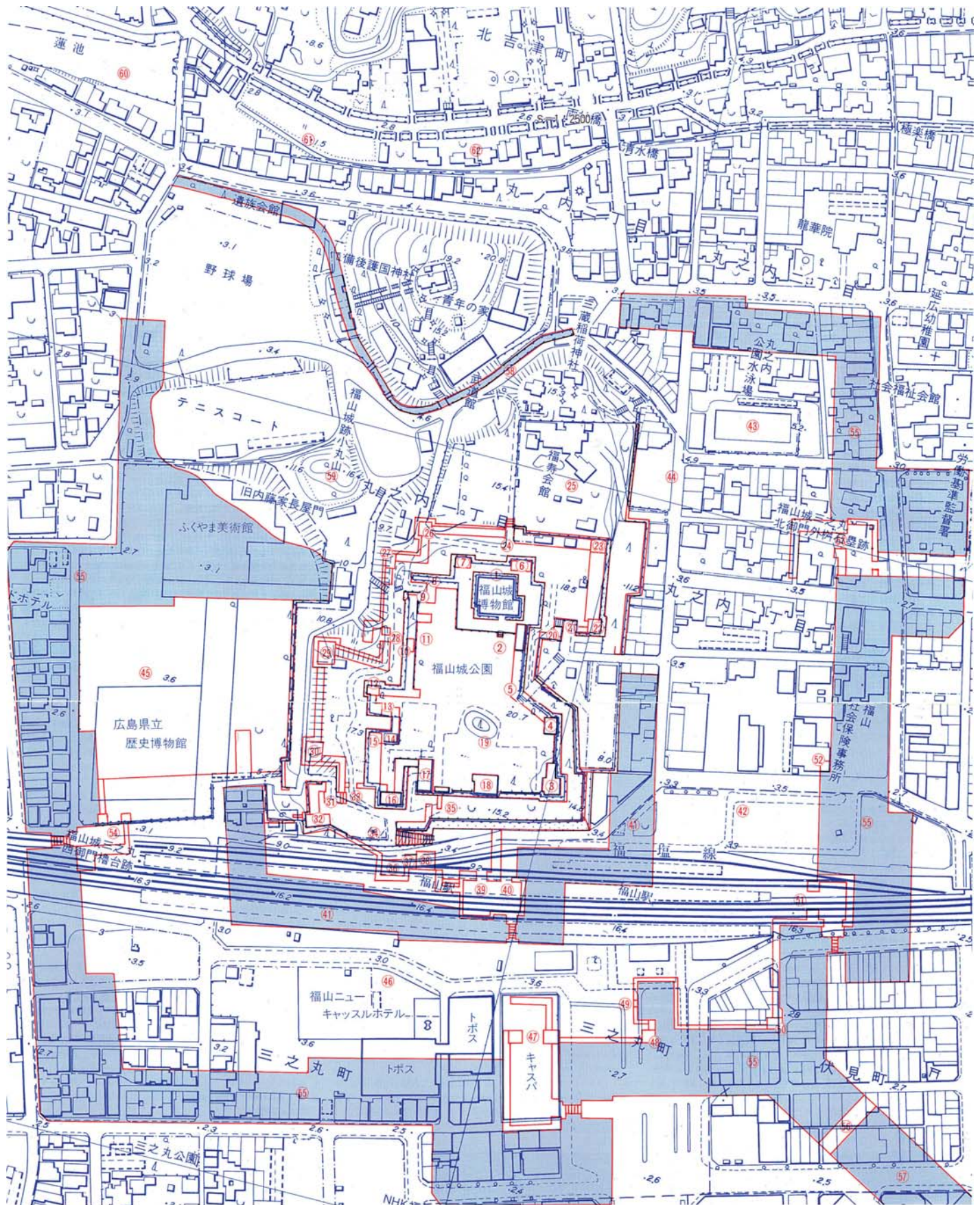




江戸時代福山城下



福山城 城郭と現在(2020.6)の重ね合わせ図



- | | | | | | | | | | |
|-----------|-------|--------|------------|--------|--------|------------|---------|-------|-------|
| 本丸 | | ⑧内六番櫓 | ⑬筋鉄御門 | ⑳藏口門 | ㉓西腰郭門 | 三之丸 | | ㉙御水門 | ㉚上水道 |
| ①天守閣 | ⑨櫓木門 | ⑭荒布櫓 | ⑭湯殿 | ㉔五千石蔵 | ㉔坂上番所 | ㉚御屋形 | ㉚二重櫓 | ㉚小丸山 | ㉚蓮池 |
| ②天守曲輪追手門 | ⑩黄金水 | ⑮人質櫓 | ⑮伏見御殿 | ㉔乾櫓 | ㉔二帯曲輪門 | ㉚御用屋敷 | ㉚物見櫓 | ㉚黒御門 | ㉚黒津川 |
| ③月見櫓 | ⑪黄金水 | ⑯人質櫓 | | ㉔神辺四番櫓 | ㉔櫓形櫓 | ㉚馬場 | ㉚城代家老屋敷 | ㉚家老屋敷 | ㉚追手御門 |
| ④鏡櫓 | ⑫御台所門 | ⑰鐘櫓 | 二之丸 | ㉔水の手門 | ㉔鉄砲櫓 | ㉚城代家老屋敷 | ㉚家老屋敷 | ㉚外堀 | ㉚築切 |
| ⑤亭櫓 | ⑬御台所門 | ⑱火打櫓 | ㉔鹿角菜櫓 | ㉔神辺三番櫓 | ㉔鉄門 | ㉚追手御門 | ㉚二重櫓 | ㉚入江 | |
| ⑥玉櫓 | ⑭鐘櫓 | ㉔東上り櫓門 | ㉔東坂三階櫓 | ㉔神辺二番櫓 | ㉔四ツ足門 | | | | |
| ⑦塩櫓 | ⑮火打櫓 | ㉔鬼門櫓 | ㉔西坂口門 | ㉔神辺一番櫓 | ㉔内堀 | | | | |
| | ⑯伏見櫓 | | | | | | | | |

ご注意

2020(令和2)年現在、執筆から十五年以上を経過し、その間の調査により、新たな発見によって修正がされ、記事内容の細かな部分にその相違がある可能性もあります。

改訂版発行日／2020(令和2)年6月

本冊子につきましては著作権がありますので、再配布、コピー、引用については執筆者の許可無く固くお断りいたします。

福山城物語

中国新聞掲載「備後史のススメ」



2004(平成16)年 5月30日(日)～
2004(平成16)年12月26日(日)掲載

掲載	中国新聞
発行日	「備後史のススメ」 二〇〇五年一月
発行者	園尾 裕



福山城物語

中国新聞掲載「備後史のススメ」



ご注意

2020（令和2）年現在、執筆から十五年以上を経過し、その間の調査により、新たな発見によって修正がされ、記事内容の細かな部分にその相違がある可能性もあります。

改訂版発行日／2020（令和2）年6月

本冊子につきましては著作権がありますので、再配布、コピー、引用については執筆者の許可無く固くお断りいたします。